教員長期社会体験研修　10～12 月期　研修報告

研修先：株式会社アドバコム　エコチル編集部/札幌
研修者：札幌市立平岡公園小学校　宇賀神　智哉

【スポチル・ウインタースポーツ特集】

▲ウインタースポーツ少年団・クラブチーム紹介（スポチル 11 月号）

当社では、環境情報紙「エコチル」だけではなく、子どもたちのスポーツライフを促進する情報紙「スポチル」も発行している。

札幌市スポーツ局から「子どもたちにウインタースポーツの魅力を伝えたいので協力してほしい」という依頼があり、スポチル 11 月号で「ウインタースポーツ特集」を行うことになった。スノーボードの全国大会で優勝した小学生や、平昌五輪に出場したプロスノーボーダーに取材を行い、記事を制作していった。

札幌にあるウインタースポーツ少年団・クラブチームを紹介する記事では、基本情報に加え、「チームの代表者 1 名のコメントを写真付きで掲載（部員の声）」、「紹介動画制作」の 2 つの案を提案した。各チームの代表者とメールや電話でやり取りをして情報を整理し、30 名の小学生の紹介と、21 本の動画を公開することができた。スポチル発行後、「自分たちのチームを紹介してもらえたことを喜んでいました」、「スポチルを見て、体験希望者が来ました」など、たくさんの反響をいただいた。

「部員の声」、「チーム紹介動画」など、基本情報以外のことも掲載したことで、広報効果が上がっただけでなく、関わった方々から「また一緒に仕事しましょう」と前向きな言葉をいただくなど、信頼関係を築くこともできたと感じている。

【田中賢介さんへの取材】

▲田中賢介さんにインタビューしたときの様子

「エコチル SDGs プロジェクト」の一環として、元日本ハムファイターズの田中賢介さんに取材をさせていただいた。情報をたくさん引き出そうとして一方的に質問ばかりしてしまうと、堅苦しいインタビューになってしまうと思い、自分が小学校の教員として経験してきたことなども交えながら質問していった。札幌に小学校をつくって教育活動に力を入れていくことにした理由、子どもたちにどのような経験をさせていきたいかなどをお聞きした。「お世話になった北海道に恩返しをしたい」「失敗を恐れずのびのびと学ぶことができる環境を作りたい」など、教育に対しての熱い想いを聞くことができ、多くの刺激を受けた。

【北海道レジ袋チャレンジの広がり、表敬訪問】

▲中野副知事（右から 2 番目）
環境忍者えこ之助（1 番右）

北海道環境生活部環境局と当社の協働で、プラごみ抑制を呼びかける「北海道レジ袋チャレンジ」という企画を行った。たくさんの企業に協賛していただいたり、鈴木直道知事からメッセージをいただいたりし、企業・行政・学校を巻き込んだ企画となった。キャンペーン目標は「1 週間、レジ袋を使わない人を 6 割にすること（3 月時点で 3 割）」だったが、11 月末時点の調査で 71.9%（環境省調べ）となり、目標を達成することができた。

また、北海道環境生活部環境局がレジ袋チャレンジ優秀サポーター「普及啓発部門・優秀賞」に選出され、環境省から表彰された。選出理由として、「エコチルを活用して、レジ袋チャレンジを道内で広めたこと」を挙げていただいた。環境大臣（小泉進次郎氏）から表彰状が届いたということで、北海道庁に招かれることになり、中野副知事にお会いした。「エコバッグを持ち歩く習慣が身に付くきっかけとなりました」などの感想がたくさん届いたことを報告した。道民のエコ意識の向上につながったと感じている。

【環境広場さっぽろ 2020 バーチャルツアー】

1 月 9 日（土）～14 日（木）まで、「環境広場さっぽろ 2020 バーチャルツアー」が開催された。会場は、バーチャル空間に創り上げたバーチャル札幌ドーム。このイベントでは、環境について楽しく学ぶことができ、お仕事体験をしたり、オンラインセミナーに参加したり、自宅でたくさんのコンテンツを楽しむことができる。毎年、札幌市と当社の協働で開催されていたが、2020 年度は新型コロナウイルス感染症の影響を受け、初のバーチャル開催となった。

会場には、環境・SDGsZONE、キャリア教育 ZONE、スポーツ ZONE、フード ZONE があり、各 ZONE に出展している企業のブースに入ると、画像、動画などを見ることができる。さらに、ライブ配信ステージでは、著名人のトークショーやアーティストのパフォーマンスを楽しむことができる。

私は、バーチャル動物園とバーチャルミュージアムを担当することになり、出展交渉、展開イメージの提案、画像・動画素材集め、バーチャル空間制作会社への制作依頼などを行った。バーチャル動物園は、複数の動物園から 1 頭ずつ代表の動物を展示していただき、紹介文、写真、動画を展開していくという企画。エコチルの「動物園だより」でご協力いただいている北海道・東京・横浜の動物園に出展交渉を行った。バーチャルイベントは前例がないためイメージを伝えるのが難しく、また年末で忙しいということもあり、出展交渉は難航したが、粘り強く交渉した結果、円山、上野、ズーラシアなど、11 園に参加していただけることになった。旭山動物園にはライブ配信も行っていただけることになった。また、バーチャルミュージアムには、国立科学博物館、札幌市青少年科学館など、7 館に参加していただいた。バーチャル空間完成後は、各担当者からは「新しいチャレンジで、すごく面白い企画ですね」と、喜んでいただけた。SNS でも拡散していただき、たくさんの方に参加していただくことができた。

▲バーチャル札幌ドーム

▲バーチャル空間の企業ブース。
画像・動画などを見ることができる。

▲バーチャル動物園。北海道・東京・
横浜の人気動物園、11園が参加。

▲バーチャル展示会。子どもたちのレポートなど
を展示し、拡大して見ることができる。

環境広場開催期間中はライブ配信スタジオへ行き、出演者（マジシャン、ギタリスト、アイドルなど）のサポートを行った。出演者のパフォーマンス、表現力にはとても感動した。出演した方々からは「小学校にもいきますので、ぜひ呼んでください」と声をかけていただいたので、今後、ゲストティーチャーとしてお招きしようと思っている。研修を通して感じていることだが、子どもたちと関わり合いたいと思っている方はとても多い。このような「人とのつながり」を大切にしていきたい。

環境広場には、およそ 20,000 件のアクセスがあった。コロナ禍を理由にイベントの開催を諦めるのではなく、別の形を模索して、時代に合わせたチャレンジをしていくことの大切さを実感した。今回のようなバーチャルイベントは、今後、需要が高まり、さらに発展していくように感じている。

◎10～12 月を振り返って

前例のないプロジェクトにチャレンジするときは、とても勇気がいる。特に、たくさんの人が関わり、お金と時間をかけた大きなプロジェクトだと、失敗するわけにいかない。それでも、「誰かの役に立つこと」、「世の中で求められていること」であればチャレンジしていくべきだと感じた。

学校現場でも、感染症対策を考慮して、授業、行事など、取り組み方を変えていかなければならないことがたくさん出てきている。そのときに、「感染の恐れがあるからやらない」ではなく、「感染症対策を万全にしつつ、取り組める方法はないか」と模索することが大切だと思う。また、「ICT 化できることはないか」ということも同時に考えていく必要がある。この大きな変化に対応するためには、この 1 年間の各学校での実践を共有し、学校の実態に応じて積極的に取り入れていくことが大切なのではないかと感じている。